

第5章 意味論

1. はじめに 意味とは何か

わたしたちの身のまわりは、さまざまな記号で満ちあふれています。非常口のサイン、温泉のマーク、男女のトイレのサインなど、だれもが目にしたことがあるでしょう。フランスの言語学者ソシュールは、この記号 (sign) を能記 (signifier) と所記 (signified) に分けて説明しました。能記とは指すもの、所記とは指されるものです。交差点の信号も記号のひとつです。信号の場合、たとえば丸い青色は能記で、それによって指される「進め」が所記です。人間のことも記号のひとつです。たとえば、「ペン」ということばを例に取ると、[pen] という音声 (あるいは「ペン」という文字) が能記で、それによって表される実物のペンが所記になります。次の表を見てください。

表1 記号の例

記号	信号	ことば(ペン)	ことば(考える)
能記	青色の信号	[pen](音声)・「ペン」(文字)	[kangaeru](音声)
所記	進め	実物のペン	?

このように記号を能記と所記に分けた場合、能記によって指される所記がその記号の意味 (meaning) になります。したがって、「ペン」の意味は何ですか、と聞かれたら、実物のペンを見せれば手取り早いし、「ペン」の指すものを口頭で説明して、「ものを書くための道具」と答えることもできます。しかし、ペンのように目に見えるものではなく、目に見えない抽象的なことばの意味はどのように説明すればよいのでしょうか。たとえば、「考える」

ということばの意味は、相手に見せて示すことができませぬ。そこで辞書を引くと、「あれこれと頭を働かせて思いはかる」と出てきます。そこで次に、「思う」ということばの意味を調べてみると、辞書には「このところにかけて気遣う。考える」と出てきます。要するに、「考える」の意味は「思う」で、「思う」の意味は「考える」という説明になります。これは意味の説明にはなりません。意味が循環して(circular)いるからです。辞書に出てくることばの意味の説明には、このように循環する場合があります。ふだん当たり前と思っていることばでも、説明するとなるとむずかしいものですね。では、ことばの意味はどのように説明したらよいのでしょうか。この章では、ことばの意味を研究する学問である意味論(semantic)を勉強しましょう。

2. ことばの意味の記述方法

一つの語だけを取り上げて、その意味を考えるのはなかなかたいへんです。そこで、まず、具体的にいくつかの語を比べて意味を考えてみましょう。続いて、二つの文の意味関係を考えます。さらに、語の意味をいくつかの要素に分けて考える方法を示します。

2.1 語と語との意味関係を考える

まずは、似たような意味を持つ類義語と、反対の意味を持つ対義語の事例を挙げます。次に、一つの語が複数の意味を持つ多義語と、同じ形式でも全く違う意味を持つ同音異義語の見分け方を提示します。最後に、上位語と下位語の意味関係を考えましょう。

2.1.1 類義語

類義語(synonyms)とはお互いに似た意味を持つ語です。同義語という語を使い人もいますが、厳密な意味で全く同じ意味を持つ二つの語というのはありませぬので、ここでは、類義語という術語を使います。たとえば、「つめたい」と「寒い」は「温度を示す数値が小さい」という点で意味が似ていて、類義語といえます。類義語の意味の違いは、具体的な例文によって考え

ることができません。

- (1) この水は手で触るとつめたい。
- (2) 雨が顔の頬に当たってつめたい。
- (3) 外に出ると、寒くて体が震えた。
- (4) 体全体が寒く感じる。

(1)、(2)の「つめたい」の用例で、(1)は手による感覚、(2)は頬による感覚で、これらの用例から、「つめたい」は手などからだの一部による感覚を表すことがわかります。一方、(3)、(4)の「寒い」の用例から、「寒い」は体全体による感覚を表すことがわかります。

次の用例も見てみましょう(文のはじめのアスタリスク[*]はその文が成り立たないことを示します)。

- (5) 石がつめたい。
- (6) 水がつめたい。
- (7) 風がつめたい。
- (8) *石が寒い。
- (9) *水が寒い。
- (10) 風が寒い。

(5)、(6)、(7)の用例から、「つめたい」は固体である「石」にも、液体である「水」にも、気体である「風」にも使えることがわかります。一方、「寒い」は(8)、(9)の用例から固体、液体には使えず、(10)の用例のように気体(空気、風など)にしか使えないことがわかります。「つめたい」と「寒い」の違いを次にまとめましょう。

(11) 「つめたい」と「寒い」の違い

語	感ずる場所	使われる対象
つめたい	からだの部分	固体・液体・気体
寒い	からだ全体	気体のみ

2.1.2 対義語

対義語 (antonyms) とは、共通点を持ちながら、ある一つの点において互いに対立する意味を持つ語です。すべてが対立するというわけではありません。たとえば、「男」と「女」は、「人間」という点では共通していますが、「性」という点で対立しています。また、「上がる」と「下がる」は、「空間における垂直の移動」という点では共通していますが、その方向が対立しています。つまり、「上がる」は下から上への移動、「下がる」は上から下への移動を表します。以下にこれをまとめましょう。

(12) 対義語の共通点と対立点

対義語	共通点	対立点
男・女	人間	性 (男性・女性)
上がる・下がる	垂直移動	方向 (上方向・下方向)

2.1.3 多義語と同音異義語

多義語 (polysemy) とは、一語でいくつもの異なる意味を持つ語です。同音異義語 (homonyms) とは、形式は同じでも互いに意味が異なる語です。たとえば、「明るい」という語を辞書で調べると、次のように出てきます。

(13) 「明るい」の意味

① [物がよく見えるように] 十分光を出しているようす。

② [性格・表情・状態などが] 楽しそうである。

(『学研国語大辞典』より)

これは、「明るい」という語が①と②の二つの意味を持つ多義語であることが示されています。一方、辞書には「セイカ」という音声の漢語がたくさん出てきます。

(14) セイカという音を持つ漢語

製菓 聖歌 盛夏 生花 成果 生家 聖火 青果 精華 正価
これらはみな、音声は同じでも別々の意味を持っているので、同音異義語といえます。

では、次のそれぞれのペアは多義語でしょうか、それとも同音異義語でしょうか。

(15) ア やさしい問題 イ やさしい母親

(16) ア 連絡がたえる イ 悲しみにたえる

(15) では、アは「易しい」、イは「優しい」という別の漢字が当てられます。(16) も、アは「絶える」、イは「耐える」という別の漢字が当てられます。第4章でも述べたように漢字は表意文字ですから、異なる文字は異なる意味を表します。したがって、この場合、異なる漢字が当てられるので、同音異義語ということになります。次の外来語の場合はどうでしょうか。

(17) ア 野球でフライを打ち上げる イ 魚のフライを揚げる

(18) ア バスに乗る イ 合唱でバスのパートを歌う

(17) のアのフライには fly、イのフライには fry という別のつづりが当てられます。(18) もアのバスは bus、イのバスは bass で、英語では別の語です。英語では別の単語であったものが日本語でたまたま同音になったものですか、どちらも同音異義語です。

このように、二つの語に異なる漢字やつづりが当てられる場合は同音異義語といえます。この場合二つの意味は全く異なり、関連性がありません。別の語ですので、辞書には別項目のところに出てきます。一方、(13) の「明るい」の場合、「①明るい部屋」も「②明るい性格の人」も同じ漢字です。同じ語がいくつもの意味を持つ多義語になります。この場合、二つの意味は全く別々ではなく、互いに関連しています。つまり、①のような目に見える物理的な明るさが、②のように人の心の明るさを表すようになったわけです(「3.3 抽象化」の『物理的』→『心理的』を参照)。多義語の場合、辞書には同じ「明るい」の項目に出てきます。多義語と同音異義語の違いを次にまとめましょう。

(19) 多義語と同音異義語の違い

文字 (漢字)	意味の関連性	辞書の扱い
多義語	同じ文字	ある
同音異義語	別の文字 (又はつづり)	同じ項目 別項目

2.1.4 上位語と下位語

ここまででは、二つの語を比べてきましたが、ここでは少し視点を変えて、

さまざまなかことばの関係を考えてみることにしましょう。まずは、身のまわりにあるものを挙げてみます。

- (20) 身のまわりにあるもの
 いす、テーブル、時計、辞書、薬、コーヒーカーップ、テレビ、タンス、茶碗、皿

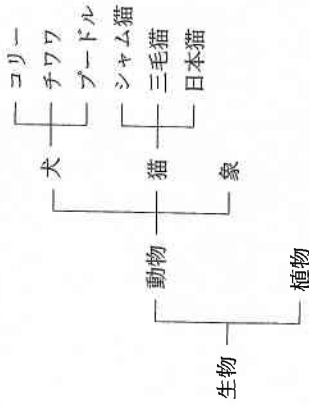
この中で、同じ種類のものとして扱えるものはどれでしょうか。たとえば、「コーヒーカーップ、茶碗、皿」は食器、「いす、テーブル、タンス」は家具としてまとめることができます。ここで、食器は「コーヒーカーップ、茶碗、皿」を含みますので、食器を上位語 (hyperonym)、¹⁾「コーヒーカーップ、茶碗、皿」を下位語 (hyponym) ²⁾といえます。次の例のように、上位語は常に下位語を含みます。

(21) 上位語と下位語

上位語	下位語
家具	いす、テーブル、タンス
動物	犬、猫、象
自然	山、川、海
花	すみれ、パンジー、ひまわり
感情	うれしい、悲しい、楽しい

上位語と下位語の関係は、これにとどまりません。上位語の上位語、下位語の下位語もあります。たとえば、動物にはさらに上位語として生物があり、生物の下位語は動物と植物です。また、犬には、さらに下位語としてコリ、チワワ、プードルなどがあります。この関係は、次のように表されま

表2 上位語と下位語の関係



このように、ことばは意味によって重層的に構成されています。

2.2 文と文との意味関係を考える

文も、語と同じように他の文と比べることによって、意味を分析することができます。ここでは、言い換え・含意・矛盾の三つの関係について考えましょう。

2.2.1 言い換え

同じ意味を持つ二つの文は言い換え (paraphrase) ³⁾ ということができます。次の例を見ましょう。

- (22) A 警官が泥棒を追いかけた。
 B 泥棒が警官に追いかけられた。
- (23) A 花子に贈り物をあげた。
 B 贈り物を花子にあげた。
- (24) A 花子は太郎から車を買った。
 B 太郎は花子に車を売った。
- (25) A ゲームは3時に始まる。
 B 3時にゲームは始まる。

それぞれのペアは意味がよく似ていますね。たとえば(22)では、Aの「警官が泥棒を追いかけた」ことが真で (true) あるならば、Bの「泥棒が警官に

追いかけた」のも真です。逆に、Bの「泥棒が警官に追いかけられた」のが真であるならば、Aの「警官が泥棒を追いかけた」のも真です。この場合、二つの文は真の条件(truth conditions)を共有しているといえます。結局、二つの文があって、「AならばBである」が真で、同時に「BならばAである」も真である場合、二つの文の関係は「言い換え」ということになります。

二つの文が同じ意味であることをいうのに、真の条件を共有すれば十分であるという学者もいます。しかし、(22)から(25)のAとBには微妙な違いがあります。たとえば、(22)のAでは警官がしたことについて言っているのに対し、(22)のBでは泥棒がどうなったかについて言っていて、文の焦点が異なっています。同じように(25)のBはAよりも始まる時間がより強調されているといえます。前節で完全な同義語はないことを述べましたが、同じように全く同じ意味を持つ二つの文もありえないことになります。

2.2.2 含意

前節の言い換えの文で、「AならばBである」が真であるというのは、「AがBを含む」ということで含意(entailment)の関係にあります。言い換えの場合、同時に「BならばAである」も真でした。つまり、含意が両方向でした。しかし、この含意が一方方向である場合もあります。

(26) A 公園管理人が熊を殺した。

B 熊が死んでいる。

(27) A 薫は男だ。

B 薫は人間だ。

(26)のA「公園管理人が熊を殺した」が真であるならば、Bの「熊が死んでいる」も真でなければなりません。しかし、逆は必ずしも真ではありません。公園管理人が殺さなくても熊が死ぬことがあるからです。同じように、(27)のAで「薫は男だ」が真であれば、Bの「薫は人間だ」も真です。しかし、その逆は真とは限りません。薫が人間であっても、男とは限らないからです。薫は男にも女にも使われる名前です。

結局、二つの文があって「AならばBである」は真であるが逆は必ずしも真ではない場合、二つの文の関係は「含意」ということになります。

2.2.3 矛盾

一つの文が真であるとき、他の文は偽(false)でなければならぬことがあります。次の例を見てください。

(28) A 太郎は独身だ。

B 太郎は結婚している。

太郎が独身であることが真であれば、結婚していることは真であることはできません。二つの文が同時に真ではありえないとき、つまり「AならばBである」が偽である場合、二つの文の関係を矛盾(contradiction)といいます。

ここで二つの文の関係の見分け方をまとめましょう。なお、「A→B」は「AならばBである」、「A⊃B」は「AはBを含む」という意味です。

(29) 二つの文の関係の見分け方

記号

言い換え 「A→B」と「B→A」がともに真である。 A⇔B

含意 「A→B」は真であるが、「B→A」は真とは

限らない。

A⊃B

矛盾 「A→B」が偽である。 A↯B

2.3 語の意味をいくつかの要素に分ける

もう一つのわかりやすい意味の説明として、意味をいくつかの要素に分けるやり方を取り上げましょう。まずは、外延と内包に分けて記述する方法を紹介し、次に意味特徴を使った記述の方法を紹介します。

2.3.1 外延と内包

あることばによって指される範囲を外延(extension)、その範囲のものが共通して持っている性質を内包(intension)といいます。たとえば、「動物」ということばを辞書で調べてみると、次のような意味が出てきます。

(30) 「動物」の意味

①生物の二大区分の一つ。多くは自由に動きまわり、感覚の働きがあり、ほかの生物を食べて生きています。人間・けもの・鳥・魚・虫など。

②「動物①」から人間を除いたもの。特にけもの。

(『学研国語大辞典』より)
 (30)で、あとの波線部「人間・けもの・鳥・魚・虫」は動物の範囲を示した外延です。一方、前の下線部「自由に動きまわり、感覚の働きがあり、ほかの生物を食べて生きて生きている」は動物に共通の性質を表している内包です。辞書の説明の多くは、このように外延と内包からなっています。なお、②は「野生の動物」「動物的働」などに使われる、人間を除いた「動物」を指して使われる場合で、①とは外延が異なっています。

2.3.2 意味特徴

前節で述べたことばの内包(ある語に属するものが共通して持っている性質)を、いくつかの要素に分けて示すというわかりやすい方法があります。この要素のひとつひとつを意味特徴(semantic feature)といいます。たとえば、「男」、「女」、「少年」、「少女」という四つの語は、次のような三つの意味特徴(「±人間」「±大人」「±男性」)によって表すことができます。

(31) 四つの語の意味特徴による表示

語	男	女	少年	少女
意味特徴1	+人間	+人間	+人間	+人間
意味特徴2	+大人	+大人	-大人	-大人
意味特徴3	+男性	-男性	+男性	-男性

意味特徴はすべて、プラスかマイナスで表されます。2の「-大人」、3の「-男性」は、それぞれ「+子供」、「+女性」の意味です。しかし、「±大人」、「±男性」で表すほうが一語ですむので、より合理的です。ここでは「±」を表すを使いましょ。なお、「±大人」・「±男性」の代りに「±子供」・「±女性」を使うこともできます。

さて、この意味特徴を使うと、2.1.2で扱った対義語の選出に役立ちます。対義語とは、共通点を持ちながら、ある一つの点において互いに対立する意味を持つ語でしたね。(31)の四つの語の中では、どれとどれが対義語でしょうか。

まず、「男」と「女」を見てみましょう。この二つは、「+人間」と「+大人」が共通していて、意味特徴「男性」だけが異なりますから対義語です。

次に、「男」と「少年」も、「+人間」と「+男性」が共通で、意味特徴「大人」だけが異なる対義語です。「女」と「少女」も同様です。

では、「男」と「少女」はどうでしょうか。「+人間」は共通ですが、二つの意味特徴「大人」と「男性」が異なっていますね。ですから対義語とはいえません。「女」と「少年」も同様です。

3. 概念体系としての意味を考える

2節では、意味を要素に分けたり、プラスかマイナスで表したりしました。しかし、ことばの意味は、数字や公式によって割り切れるものばかりではありません。むしろ、割り切れないものの方が多くあります。しかし、そうはいっても、私たちがことばを使って自分の言わんとすることを表現する背景には、一定の原理によって統一され、組織化された概念体系(conceptual system)があります。

この節では、意味がことばによってどのように表現されるのかを、概念体系の研究によって明らかにしましょう。まず、境界線を引くことがむずかしいあいまいな概念の例を挙げ、次に概念と概念を結びつける比喩について述べ、最後に具体から抽象に意味変化する抽象化を取り上げます。

3.1 あいまいな概念

概念(concept)とは、ことばによって私たちが頭の中に思い浮かべるイメージのことです。たとえば、「赤いバラ」といえば、鮮やかな色のバラをイメージすることができるといえます。しかし、このように具体的でなく、境界線があいまいな概念もあります。たとえば、「頭がいい」ということばの概念を考えてみましょう。偏差値がいくつ以上だったら「頭がいい」という基準が、はたして設けられるでしょうか。偏差値が低くても、要領よく世渡りができる人は「頭がいい」、といえるかもしれませんね。このように、「頭がいい」の概念は、場合によって、また使う人によっても少しずつ異なります。このような概念のことをあいまいな概念(fuzzy concept)といいます。ほかに、「年取った」「背が高い」「きれいな」「バーゲン」「強い」「スポーツマン」

など、日常よく使うことばの中には、あいまいさに満ち満ちているものがある。たくさんあります。

概念を記述する上で、もうひとつ大切なことは、ある概念に属するいくつもの語に典型性 (typicality) による段階 (grade) があるということです。たとえば、「鳥」ということばを辞書で調べると、「前肢が羽に進化し、温血で、卵を産み、羽が生えた脊椎動物」という定義が出てきます。しかし私たちが、そのような共通の概念を持っているにもかかわらず、ある種の鳥はほかの鳥よりもずっと鳥らしいと感じています。スズメやハトはダチョウやペンギンよりも鳥らしいということは、だれでも直感でわかりますね。

このような例によって、概念には段階性があることがわかります。



図1 「鳥」という概念の段階性

図1では、一番内側に原型的 (prototypical) な鳥が来て、外側にいくにしたがって典型的でない鳥になります。スズメやハト、カラスなど、日常よく見かける鳥が内側に来ていますね。一方、フクロウやワシなど、日常あまり見かけない鳥は外側に来ています。また、ペンギンやニワトリなど、空を飛べ

ない鳥が外側に来ていることから、空を飛ぶというのも鳥の典型的概念のようです。

あいまいな概念や概念の段階的構造があるということは、ことばで表現される概念の多くは、黒白はっきりとした厳格な概念ではないことを示しています。

3.2 比喩

ことばによって表される概念は、それぞれがばらばらというわけではありません。むしろ、互いに関係しあって大きなネットワークを構成しています。そのよい例が、ひとつの概念を別の概念で表す比喩 (metaphor) です。たとえば「あの人はバラの花のようにきれいだ」という場合、バラの花のイメージによって女性の美しさを表しているわけで、「バラの花」と「女性」という別々の概念が、美しさという点で結びついているといえます。

比喩といえば、作家や詩人だけが使える文学的手段だと考えてしまいがちですが、実は私たちが日常よく使っています。たとえば、時間を日用品のよ

うに扱う比喩を挙げましょう。

(32) 時間を無駄に使わないでください。

(33) 時間を節約しましょう。

(34) あなたは私の時間を盗みました。

これらの四角で囲んだ「時間」は、すべて「お金」に置き換えることができま

3.3 抽象化 (metaphorical extension)

前の節で、「お金を使う」と「時間を使う」の違いは何でしょうか。たとえば千円使うときの千円札は見えますが、時間を使うときの時間は見えません。したがって、「お金を使う」の方が「時間を使う」よりも、より具体的な用法と言えます。この場合、「お金」と「時間」は別々の語で、一方は目に見える『もの』という概念、もう一方は目に見えない『時間』という概念

を表します。ここで、『もの』は、目に見える「机」「椅子」などの物体を代表した概念、『時間』は、目に見えないが、「1時間」、「1分」など、数字で表すことができる語を代表した概念を表します。このように、ある範囲の語を代表した概念を意味範疇 (semantic category) といい、『 』で示すことにします。しかし、同じ語が二つの異なる概念を表す場合もあります。次の例を見ましょう。

(35) 人のあとについて行く。

この「あと」は空間的な「うしろ」という意味です。「あと」はもともと「足跡」という意味でした。足跡は目に見える『もの』という概念に属します。それが空間的「うしろ」を表すようになるのは、図2のように、足跡が人の「うしろ」にできるからです。

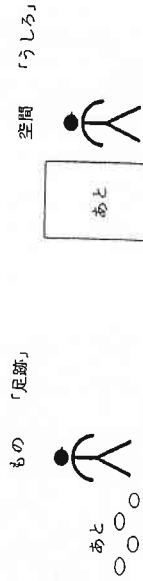


図2 「あと」の「足跡」(『もの』)から「うしろ」(『空間』)への変化

ここで、『もの』に属する「足跡」は触ることができ、『空間』に属する「うしろ」は触れませんから、前者の方が具体的です。文献を歴史的に見てみると、前者の用例が先に現れ、後者は後に出てきます。したがって、ひとつのことばの意味が具体から抽象へと変化することになります。これを抽象化 (metaphorical extension) といいます。この意味変化を『もの』→『空間』と表すことにしましょう。

さらに、次の例を見てください。

(36) 先が思いやられる。

(37) 末は博士か大臣か。

「先」も「末」も時間的未來を表しています。「先」や「末」はもともと「もの先端や末端」を指し、空間的概念を表していましたが、「先」は自分の前にある空間を表し、前の空間はこれから足を踏み入れる空間であることから、図3のように、時間的概念である「未来」を表すようになります。



図3 「さき」の空間的「前」から時間的「未来」への変化

ここでも、空間的「前」は目に見え、時間的「未来」は目に見えませんが、前者の方が具体的です。歴史にも前者の用例が先に現れ、後者は後に出てきますので、意味は具体から抽象へと変化しています。「末」も木の末(梢)など、木の最も遠い末端という空間的概念から、時間的に「遠い将来」を指すようになりました。この意味変化を『空間』→『時間』と表すことにしましょう。次の例に移ります。

(38) 志が高い。

(39) 次元の低い考え。

「高い」「低い」はもともと空間的概念でしたが、高いところからは低いところを見下ろすことができるとい位置関係から、(38)の「高い」はよい質を、(39)の「低い」は悪い質を表すようになりました。これを『空間』→『質』と表しましょう。次の(40)はどうでしょう。

(40) 燃える闘魂。

「燃える」はもともと物理的に「火」が燃えるようすを表しましたが、この場合、火が燃え盛るように「闘魂」が燃えるようすを表しています。「闘魂」は心を表しますので、この変化は、『物理的』→『心理的』と表します。これまでの意味変化を次にまとめましょう。

(41) 意味変化の公式 (具体から抽象へ)

公式

- 具体的 → 抽象的
- 『もの』 → 『空間』
- 『空間』 → 『時間』
- 意味
- 『もの』を表していた語が『空間』を表すようになる。
- 『空間』を表していた語が『時間』を表すようになる。

『空間』 → 『質』 『空間』を表していた語が『質』を表すようになる。

『物理的』 → 『心理的』 『物理的』様子を表していた語が『心理的』様子を表すようになる。

このように、ことばの意味は具体から抽象へと変化します。

4. おわりに

この章では、「±」の意味特徴や比喩の公式などを使って、ことばの意味を数学的に扱ってきました。しかし、人間のことは、そう簡単に割り切れるものばかりではありません。たとえば、「はじめに」で挙げた「思う」と「考える」の違いを記述するのに必要な意味特徴はあるでしょうか。心のいともみですから「+心」としたらどうでしょう。それでも二つを区別することはできません。

さらに2節では、同音語で別の漢字が当てられた場合は意味が異なるので同音異義語であるというやり方を示しました。しかし、たとえば「付く」と「着く」の場合はどうでしょう。もちろん、違う漢字だから別の語だということも考えられます。確かに「ごみが服に付く」と「列車が駅に着く」では同じ「つく」でもずいぶん意味が違うように思えます。ところが、「ごみ」も「列車」も、もとは別のところにあつたものが「服」や「駅」に接着し、結果的にその中にあるという点で、もともとは同じ語源ではないかとも考えられます。

みなさんも、いろいろなことに疑問を持ち、解決方法を模索してみてください。

第5章のキーワード

記号 能記 所記 意味 意味論 類義語 対義語 多義語 同音異義語 上位語
下位語 言い換え 真 真の条件 含意 偽 矛盾 外延 内包 意味特徴 概念
体系 概念 あいまいな概念 典型性 段階 原型的 比喩 意味範疇 抽象化
もの 空間 時間 質 物理的 心理的

参考文献

『一般言語学講義』 フェルディナント・ド・ソシュール 小林英夫訳 1940年 岩波書店
O'Grady et al. 2005. *Contemporary Linguistics* Fifth Edition. Boston/ New York: Bedford/
St. Martins.

〔2.2 文と文との意味関係を考える〕〔2.3 語の意味をいくつかの要素に分ける〕

〔3.1 あいまいな概念〕は Chapter 6: 204-212 ページの記述を翻訳し引用。

『イメージ・スキーマに基づく格パターン構文』伊藤健人 2008年 ひつじ書房

〔図1「鳥」という概念の段階性〕は138ページの〔図2 鳥のカテゴリ〕を引用。

『学研国語大辞典』金田一春彦・池田弥三郎編 1978年 学習研究社

〔(30)「動物」の意味①、②〕はこの辞書の「動物」の項を引用。

『構造的意味論』国広哲弥 1967年 三省堂

〔(11)「つめたい」と「寒い」の違い〕は「意味論」の〔2 日英温度形容詞の意義素の構造と体系〕13-14ページによる。

『形式語の研究』日野資成 2001年 九州大学出版会

〔図2「あと」の「足跡」から「うしろ」への変化〕と〔図3「さき」の空間的「前」から時間的「未来」への変化〕は「第2章抽象化」の28ページと31ページより引用。

推薦図書

意味分析の方法と実践について知りたい人に

⇒ 『意味分析の方法』森田良行 1996年 ひつじ書房

類義語の意味記述について知りたい人に

⇒ 『構造的意味論』国広哲弥 1967年 三省堂

⇒ 『基礎日本語』森田良行 1977年 角川書店

⇒ 『類義語使い分け辞典』田忠魁・泉原省二・金相順編 1998年 研究社出版

対義語関係にある語を調べたい人に

⇒ 『反対語辞典』櫻井正信監修 1991年 日本文芸社

比喩の結びつきについて知りたい人に

⇒ 『形式語の研究』日野資成 2001年 九州大学出版会

⇒ Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.

文法化における意味変化について知りたい人に

⇒ 『形式語の研究』日野資成 2001年 九州大学出版会

⇒ 『文法化』P.J. ホッパー/E.C. ト라우ゴット 日野資成訳 2003年 九州大学出版会